『餡パンです』

と勿論答へた。次の馬關線に掛つてゐる野郎がくす〳〵笑ひやがつた。

『何んで此樣な所へ挿します』

當り前ぢやないか。餡パンは食ふ爲めに挿して置かないで、どうする。

『えゝ、此れは賴信紙が風で飛ばないやうに押へにしてあるんです』

とおれは我ながら感心なうまい事を言つた。

『此りや新工夫だ』

と巡視官は頗る感心したらしい。お蔭で課長も多きに面目を施したから、あの巡視官は本省に歸つて、鎌田式新裝置の新發見で、又民間の學者と法科大學で論判をやるだらう。おれの出世も段々有望になつた。

おれはもう通信生はいやになつた。相手の局に少し腕の利いた奴が出て來

ると、『ヘボ代れ』、『おい新米』なんかはお手柔かなうちだ。音信だと思つて懸命に受けてゐると、『君の御爲め豫てより覺悟はきはめてゐながらも』なんかと打つて來る。業を煮やして『ばか、報告するぞ』と脅しでもしやうもんなら、『おい貴樣はそれでも人間か』、とか、『首でも縊れ』とか、『こん畜生ぶる〳〵う』と何が何んだか解らないことをする。相手にならずにゐると、次の音信の終りへ、『エム、エム、ムシ』と附けやがる。エム、エムは『注意を要す』で『ムシ』は『返答遲延』。即ち此方が遊んでゐて此の電報は遲延したのだと註を施して來るのである。此奴が附いたが最後、職務怠慢の罪で以て課長から餡パン以上の眼玉を食ふ。斯うして見ると七十三錢は本統に馬鹿々々しい。大いに揑ねやうにも、勞働者ではないから自覺が出來ない。おれは從兄の傍にゐる所爲か、侍の息子で、畏れ多くも判任官未遂の身の上が悲

しくなつて來た。どうも斯う勞働者が有り難くなる時勢が來ると知つたら、先祖に頼んで『大井川深いね』の雲助でも志願して置いて貰ふ所だつた。多田の滿仲さんは子孫が此れほど侍で苦勞するとは思はなかつたらう。おれも次男を幸ひ、從兄のやうに『新平民』にならうかと思つてゐる。

今日は從兄に呼び着けられた。從兄は此頃はもう玄關脇の書齋を廢めて、教會からクリスマス・プレゼントに貰つた裏の離れの書齋に得意然と納まり返へつてゐる。お蔭で母屋で『西は夕燒け、東は夜明け』位小聲で唄つても從兄に聞き咎められる虞れが無くつて大部樂である。此の間從兄が銀行家の豐田さんから聞いて來た話だが、其の豐田さんが近所の人たちと購買組合とか言ふものを組織した。其の仲間のうちに本願寺とかの坊さんがあつたさうだ其の坊さんは此頃、『四十五錢になつたからどうとか、五十錢だからどうだ

とか、米の相場を一々斯う相談をしてゐては、どうも煩惱が起つて、布敎師たる資格にまで影響して來るから、此樣な會には僧侶として加はるべきものではないと』言ふ理由で退會を申出でたと言ふ事だ。從兄は其れを細君に話して、『其所が佛敎の佛敎たる所だ』と頻りに感心してゐた。おれも贊成である。從兄の家の暮しの事なんかを氣にしてゐては、どうも煩惱が起つて、すき燒を食つても本統の味が出ないし、嵐山邊りに遊びに行つても面白くないだから此の頃おれはそんな事は一切考へないことにしてゐる。此れで本願寺邊に行けば、何とか言ふ博士相當官位の稱號が貰へるだらう。其れを感心するだけ從兄なんかも世間ぢや餘り信用がない。此の間、細君の兄さんが萬養軒の二階で、從兄の友人を捕へて、從兄の事を、『うん、彼奴は着物を左前に着るのか、右前に着るのかも知らない、ぼんやりもんだ。あんな奴に活き

た世界が解るもんか』と批評したと報告せられて、從兄は眞赤になつて憤つた。『佛敎の佛敎たる所』に感心するなら、此れだつて憤る道理はない。寧ろ名譽に心得べきことだ。然るに元來當りの解らない男だから此の蔭言には大いに憤つた。『何んだ、失敬な』とか何とか、頻りにぶつ〳〵言つてゐた。おれは臺所に行つて出刄疱刀を隱して置かうかと心配した位だ。細君は平氣なもので『自分の身内のものを褒める人はありませんわ。御世辭に言つたんですよ。其れに蔭で言つた事ぢやありませんか。貴方の偉いことには感心してゐるんですからね』と、此の女は昔幼稚園の先生をしたゞけに、誰でも幼稚園並に扱つてゐる。すると從兄は『さうかそんなら好い』とにこ〳〵した。此の分で行くと此所の細君は身内のおれの事なんか、蔭では大いに御世辭を言つてゐることだらう。其の御蔭でおれは呼び着けられたのだ。御世辭は成る

べく御手柔かに願ひたいもんだ。事件は斯うだ。

一昨晩おれは嵐山の夜櫻を見物に行つて、四條の角で電車を降りたが、腹が空いて仕樣がなかつたので、四條から此所まで、通路に當るうどん屋の店には必らず立ち寄つていやでも一杯宛食ふ決心をした。始めのうちは四角な軒、あんどんに、『親子なんば』とか何んとか書いたのが見えると嬉しくつて仕方が無かつたが、十五杯ばかり食つてから、二條の通りへ出た頃は、もうあの看板を見ると借金の相手に逢つたほどに畏はくなつた。平生何の氣もないときはうどん屋なんか、さう澤山は無いやうたが、斯うやつて見るとそりやあ驚く。時には一町位の間に三軒もある事がある。おれは空恐ろしくなつた忘れても孫子の末まで此樣な決心をするもんぢやない。物價が高くなつて分量がずつと減つた今日此頃だから好いやうなものの、二三年昔ならおれの命

が危かつたに相違はない。丸太町の邊ではおれは亭主に濟まないけれども、亭主の見ない間を窺つて、さうつと腰掛けの下へあけて、汁ばかり飲んだ。其れに上京の方へ來ると車を引いて歩いてゐる夜泣うどん屋が無暗と居るから尙更大變だ。其の上此奴は『お代りは如何どす』なんかんと言ひやがつて、負口の碁打ちのやうに鼻の先きで此方の手元を睨み据えてゐるから一層仕末が惡い。おれは後には困つて『おい鼠の尻尾が入つてゐるぜ』と胡麻化してゐんやつと半分で切り拔けたときさへあつた。

お蔭で家に歸り着いたときは、もう二時頃だつたらう。表の戸が締めてあつた。おれは例の土塀に下駄で乘つて、中庭に飛び降りて、勝手を知つてるから、部屋の前の、割に短い戸を外して入つて寢た。此れが早くもばれたのである。全く細君が蔭で御世辭を言つた所爲だ。從兄はおれを前に座はらせて

置いて、唐網で魚でも取るやうに四方八方から捲くし立てた。默つてゐやうとしても、此奴は段々狡猾になつて是非相當の返事をしなければ承知しないどうも向上だの、修養だのと言つてゐるがおれの見た所では從兄は追々人が惡くなつて行くやうだ。『貴樣は犯罪人の素質がある』だの、『貴樣はどうしても低能だ』だの、『遊んで食ふ積りなら女髮結と結婚しろ』だの、驚くほど攻道具を用意してゐる。勉強、勉強と閑さへあれば書齋に入浸つてゐるのは、此樣なことを研究する爲めと見える。流石のおれも斯う不勉強や、遊び廻る證據を擧げて一體貴樣は何が目的だと、詰め寄せられては困つて了ふ。ぶら〳〵遊んで、人を自由自在に使ふやうな偉い役で、勉強しないで濟む目的はないかとおれは一生懸命に考へた。

『おい默つてゐては解らない。いくら立派な目的があつても、其樣な態ぢ

や、到底成功は出來ない。おい、何とか返事をしないぢや解らんよ』
と從兄は大部せき込んで來た、おれは悠々と、
『僕は土木の受負師になる積りです。勇山はえらいです』
と言つてやつた。從兄は『うん』と言つたまゝ行き詰つて了つた。見やがれ、
到頭參つたらう。暫くして
『好し』
と言つて從兄は立つて行つたが、柱にぶらくつてある態を退治るとか言ふア
イヌの鋭い匕首を拔いて來た。此奴は少々劍呑になつた。おれは少なからず
狼狽した。
『さあ勇山なら、此れで腕と顏とを十個所ばかり眉をしかめず切つて見ろ』
と命令した。物騷な奴だ。おれは修身の先生に教はつたが『夫れ身體法被之

を父母に受く、敢て負傷せざるは孝の本なり』と言ふことがあるさうだ。親
不孝を勸める不都合な牧師があるかと叱つてやらうと思つたけれども口ぢや
到底及ばない。流石のおれも此れには閉口した。早速手を代へて
『兄さん美濃紙はありませんか、それから使はない新の筆を一本貸して下
さい』
とおとなしく言つた。どうしても今日は遁れないと覺悟をしたからだ。從兄
は卓子の一番下の深い抽出しから、美濃紙の罫紙を出して、それから上の抽
出しの筆入れから、神妙に新しい筆を出した。感心に何んでも用意してゐや
がる。
おれは其所にあつた鍼力のゴム判にインキを附ける奴を取つて、眼を瞑つ
て匕首で突然二の腕を斬つた。餘り痛くはなかつた。おれは眼を開けて見て

意外に大きな疵だつたので、少し驚いたが、平然其の血をインキ附けの蓋に受けた。從兄は感心して見てゐる。態を見ろ。

それからおれは新しい筆に血を吸はせて、證文を書いた。血がねばつてにじんで、中々思ふやうには筆が動かない。

謝り證文

一、拙者金錢をムダ費ひし、夜中塀を乘越へ候段墮落致し候以後は貴殿の言ふ事を守るべく候土木受負師はヤメ候也十々惡く候頓首再拜

月日

鎌田英次

として從兄の宛名にした。

從兄は其れを一眼見て突然丸めて了つた。而して、

『僕は旅順封鎖の司令官ぢやないよ』

とおれの顏に叩さ着けた。おれは眼が霞んだ。赫と頭に血が昇つて摑み掛つてやらうと思つてゐると、

『馬鹿ッ』

と從兄は恐ろしい權幕で起ち上つた。おれは吃驚して頭を押へた。なぐり着けるかと思つたからである。今日は夥しく虫の居所が惡い。大方本屋に原稿を返へされでもした筈先だらう。それでも從兄は良心に恥ぢたかして、其のまゝ書齋を出て行つた。手數の掛る野郎だ。癪に障つて仕樣がない。涙がぼろ〳〵と零れた。

おれは顏を洗つて、角の菓子屋に行つて、從兄の家の帳面に、煉羊羹を二本附けさせて、其れを持つて御所の森に行つた。其奴を片端からむしや〳〵食つてゐるうちに腹の虫が漸く納まつた。空腹には米の飯、涙の眼には菓子

とちやんと胃散の廣告に斷はつてある。

午飯を從兄と向ひ合せで食はねばならないのには、閉口した。從兄は默つてむしや〳〵食つてゐる。まだ御機嫌が治らないのだらう。細君までが解りもしない癖に見眞似をして白い眼をしてゐやがる。おれは幸ひ羊羹が大部腹の足しになつてゐるから、故更と心配さうな顏をして、飯を控目に食つた。此奴夫婦がどんなにつんけんしてもおれは少しも困らない。二三日少々早く起きて庭でも掃いて、二三遍敎會に續けて出席すれば御冠の縱に納まること受合である。心配するには當らない。當世で行くと大に煩悶する所だが、煩悶をすると白髮が殖えるさうだから、此の若い身空で頭が眞白になつては大變だ。從兄の友達の伊田先生なんかは從兄と同年だと言ふのに、非常に白髮が多い。至極穩やかな立派な先生だが、どうしてさう煩悶があるのかと不思議

だつた。然し聞いて見ると最千萬だ。日露戰爭に出征して、ズドンと一發橫腹を射貫かれたのださうだ。して見ると活き死の煩悶をして一夜のうちにあんなに白髮が殖えたのかも知れない。いつも洋服をきちんと着てゐられるから腹の樣子は好く解らないか、軍艦ならば橫腹を射貫かれゝば、水が入つて沈沒するけれども、陸の上の人間だから、穴があつても差支へはないらしい。下品な事を言ふやうだが、腹に穴を明けてあるのは、此の頃のやうに物價の高い時には誂へ向きだ。口から食べては、腹の穴から出して、又食べてゐれば、搗減り一割と見ても一度の食事が十度には通用する譯だ。然し同じ白髮でも少しも黑髮の混じらない原政友會總裁のやうでは困る。あの人の腹は非常に黑いさうだが黑い筈の髮が眞白になつた爲めに白い筈の腹が黑くなつたに相違はない。髮の毛に下劑でも掛けたものと見える。おれはいくら總

理大臣になつても腹の黒くなるのはいやだ。いもりのやうに赤くつてさい餘り氣味の好いものでない。

おれは近々免職になるかも知れないと心配してゐる。然し今免職しては官が非常な損をするから大概なら大丈夫だらう。と言ふのは少々説明を要するが事實は斯うだ。

電信局には通信係と試驗係と言ふものがある。試驗係は電信線路の試驗をする係である。此奴は大概判任官か高等官で、おれたちよりは位がずつと上だ。だからおれたちよりも威張つてゐる。何んでも甚だ重要な役だとあつて『ヒヤア、試驗』と名乗つて先方の機械に現はれて來る。然し大底はおれたちより老耄だから、機械を打つのは頗るまづい。まづい癖に威張つてゐる。今朝早天先方の局から、『ヒヤア、試驗、昨夜來御局地方の天氣は』と東京から聞

いた。おれたちは徹夜の番で二人起きてゐた。面倒臭いから『ヒヤア、通信昨夜來御局地方のおでん屋は』と答へた。顔が見えないんだから何んでも言へる。『ヒヤア、試驗、眞面目に答へられたし』と言つた。おれは早速『ヒヤア通信、正直に答へられたし』とやつた。『ヒヤア試驗』と一々ヒヤア試驗を附けやがる。試驗位に恐入るもんか、自惚れるない。『職務上の必要なり、答へられたし』。五月蠅い奴だ。『我輩も職務上必要なり』とやつた。すると今度は別の線路から呼び出して來た。おれは早速其の線路の機械に出た。『ヒヤア試驗、主幹に至急御掛りを乞ふ』と言ふ、おれは左の手で『ヒヤア主幹とわざとまづく打つた。試驗の奴有る事無い事、おれを散々惡く言ふ。おれは早速『あの係は模範現業員なり、貴公が惡い』と叱つてやつた。試驗係は其のまゝ引込んで了つた。七時頃皆起きて來て忙がしくなつた時刻を見計ら

つて、飛んでもない線路を廻つて至急局報で、『昨夜の徹夜員がどうとか、斯うとか』課長宛親展で報告して來た。課長が出て來るや否やおれは呼び着けられた。一昨日は從兄に呼び着けられ、今日は課長に呼び着けられか。あのときの左の二の腕が今だにじか〳〵痛む。課長なら血書を採用するだらう罷り間違へば、又證文を書くだけだと思つて控へてゐると、課長は長つたらしい説教をする。何が幸になるか解らない。昨夜徹夜をしたのだから、頭がぼんやりして唯だ眠たいばかりだ。『それが解つたら宜しい』と課長が勝手に言ふから、おれは其のまゝお辭儀をして歸つて來た。何が宜しいのか今以て解らないが、事に依ると免職させると言つたのかも知れない。毎日遞信公報を勢出して讀んで見やう。其のうち辭令が出るだらうから自づと解つて來る。若しか免職を食つたら、共同貯金が受取られるから、其れを旅費にして

東京に行つて、あの試驗係と決闘してやるつもりである。心配するには當らない。

いよ〳〵出發する前に、都ホテルの料理を食つて、角の菓子屋の掛八十六錢を仕拂つて置きさへすれば、もう決闘に負けても思ひ置くこと更になしだ。『十八年が其の間』の御恩は、俺が潔よく決闘した大和魂に免じて帳消して貰はう。あゝ何だか、悲しくなつた。本統にならない樣にしたいと思つてゐる。

今日はステエションに友人を迎ひに行つた。十五日で西陣の職工や織子の休日だから電車が混んで仕樣がない。運轉手臺に立つてゐると、運轉手が『車内におはいりを願ひます』と言つた。下等なワッフルの芋餡のやうに一杯詰つてゐる人間の中へ割り込まれるもんぢやない。おれは巡査が二人までも平然と構へ込んでゐる事だから、一向差支へがないと心得て、何と言つても動か

ない積りでゐた。すると運轉手は扉を開けて突然僕を押込まうとした。紙屑ちやあるまいし、さう都合よく人間の幅が縮むもんか。おれは癪に障るから『はいれないよ』と怒鳴つた。運轉手は『それならば降りておくれやす』と抜かす。おれだけ降す法があるかと思つたので、おれは巡査と運轉手の顏を見比べて、白い眼をしてゐた。圖々しい運轉手はそれにも辟易せず、成るべく巡査の方を見ないやうにして、『警察がやかましうおすさかい、降りておくれやす』とおれの手をぐんと握つて、車から下へ降さうとする。引摺り降されては紳士の體面に關すると思つたから、おれは默つて降るには降りたが、今以てあれは如何言ふ理由だか解らない。警察のやかしい所へ、警察がうよう〻よ立ちはだかつてゐるのはどうしたものだらう。警察ならば其の筋の御達しに背いて好いのだらうか。すると盜人は盜人が盜人をするんだから盜人になるのだが、巡査ならば盜人をしても盜人にはならない勘定だ。成程此の頃一向巡査を志願するものがないと言ふことだが、盜人は餘り面白くない商買ださうだから、いくら世智辛い世の中でも、人が二の足を踏むのも最千萬だ。斯うなると世の中は中々物騷だ。『屑イッ、御拂物はありませんか』、『おい屑屋が來たせ、下足を好く仕末して置きな』とは昔の事で、『御免、戸籍調べですか、御宅に御變りはありませんか』、『そら來た、おい眼の光に注意しな』と言ふのが當世とならう。模範青年會が燒打ちをしてお上の御褒美を戴くし、巡査は捕へられる役を兼務するとなると、盜人が集まつて自身番でも拵えねばならなくなる。御芽出度い事だ。歸つて從兄に相談して前後策を構じやうと思つたけれども、彼奴は神戸以來ひどく巡査に感服してゐる先入主がゐるから到底駄目だ。

兎も角おれは次の電車に乘つてスチエションに行つた。何事か大勢フロックコオトの役人がゐる。軍人もゐる。鬚の生へ工合から大概皆高等官だらう此れで思ひ出したが此頃ぢや人が自分から高等官と名乗るのを耻ぢるやうだが、飛んでもない事だ。特殊部落だつて陸軍中將も出れば、法學博士もある當世だ。高等官必らずしも十割まで末は監獄と定つたものでもあるまい。現在其のうちに百分の一位は鹽屋判官のやうな人があるに相違はない。此れは實に世界に誇るべき一大事實ではあるまいか。新聞が人種平等反對の國々を盛んに攻擊してゐるけれども、あんな廻り諄い事を言ふより、右の如き堂々たる事實を大いに特筆大書した方が効があらう。『公吏、官吏にして、今日と雖も尙ほ正義練達の士、全數の百分の一に及ぶべし。是れ實に世界の何れの國に於ても見る能はざる盛事ならずや。殊に日本に於ては婦人は皆門閥な

く、貴賤なし。歐米に於ては賣笑同胞婦人に對して慢りに醜業婦なる名目を附し之を壓迫すると聞く。是れ人道上看過すべからざる偏見にして、苟も平等を說き民主を論ずる國民として哂ふべき矛盾なりと言はざる可らず。此の國に於ては娼妓或は藝妓、酌婦と雖も、其の人にして若し才色あらんか、一躍大勳位公爵夫人たり得べく又準夫人たるを得べし。吾人は衷心より此の美風を謳歌せずんばある可らず。南洋土人の妻妾に甘じて赴く婦人、之を世界何れの所に求むるを得んや。請ふ天下斯くの如く公平なる國民あらば之を示めせ』とか何とか其の邊は筆がタンゴダンスよりもぐるぐる自在に廻る新聞記者の事だから、此れだけの資料があればおれなんかの文章よりももつと深刻に行けるだらう。ウキルソンだつて、ロイド、ジョオジだつて、クレマンソウだつて此れには一句もあるまい。電燈の針金見たやうなヒウズとかコオ

ドとか言ふ平等反對の男でも此の議論には參るに相違はない。

汽車が着くのを待つてゐる所へ警手が、フオウムの端に立つて、列車の來るのを待つてゐる客を追ひ除け初めた。客が雪崩れを打つてフオウムの別の側へ行く。さあ大變、汽罐車が火を吹いて着するに定つたと。おれは狼狽して、ベンチの上へ飛び上つた。すると、

『降りて下さい、下駄で乘る所ぢやありません』

と警手が飛んで來て、叱つた。萬事が木札で要領を得させやうと言ふステエションの事だ。物を盛んに並べて賣子の娘を据えて、其の上に『賣店』と斷つて見たり、其の四疊半の仕切の横へ『賣店勝手口』と銀文字入り黑塗の世間ならば先づ正五位勳四等の辯護士ほどな看板を出したりしてゐるぢやないか、『設令へ生命危險の場合と雖も、此の所へ登る可らず』と牛込見附の土手見たやうな立札をベンチの下に建つべき筈だらう。

其所へ汽車が平氣な鼻面をして入つて來たにはおれは驚いた。一體何んだらうと思つてゐると、汽車は着くするや否なや即刻失敬するものと思つてゐる乘客の事だし、汽車賃はベンチの損料だと信じてゐる連中の事だから、我れ勝ちに乘込まうと競爭する。其奴を、ステエションの役人たちが此所を先度と堰止めに奮闘してゐる。何時の間にか巡査までが六七人やつて來て加勢をしてゐる。内亂でも起たのかとおれはひや〳〵した。やがて人の波の間に三尺ほどの通路が立派に出來た。お上の御威光は偉いもんだ。それでも何のための通路だらう。午前十時過ぎであつて見ると汚穢屋が來る筈もない。然し先刻の實例があるから警察署御用達の汚穢屋かも知れない。それなら此れほど役人たちが骨を折らなくとも、百姓が御荷物を擔ひで通りさへすれば、

それで路は自づと出來る道理だと思つてゐると、乘客が皆一齊にブリッヂの方を向いた。『來たなあ』とゐれも其の方へ鼻を捻ち向けた。副參事驛長さんが、ニシンを鹽で堅めたやうなカアキ色軍服の爺さんの案内をして降りて來た。爺さんは鞭のやうに細い指揮刀を左手にぶら下げてゐる。肩章を見るとモオルが三筋と星が三つ附いてゐた。陸軍大將と見える。梅干婆さんと言ふことがあるが、此の爺さんの顏は丸くはないから、先づ金柑の鹽漬けと言ふ所で、ひょろ長く凋んでゐる。何所の何方か見當が着かない。高等官たちは小學兒童が級長の號令でも受けたやうに好く揃つてお辭儀をした。側にゐた商人が『△△さんや、斯う待たせて、殺生やな』と言つた。まさか、國家の大忠臣△△元帥が此樣な事をなさるもんか。思つても見るが好い、假りに此所へ三百人の昇降客があるとする。直立時間が手前の所で三分間先の方で五分

間、平均四分間である。全乘客三百を之に掛けると千二百分間、即ち二十時間になる。此れを賃銀に直すと、船大工二人柄で六圓、石工同じく六圓、土方ならば四圓、電話線路ならば二百四十回通話で最低市外料金四十圓に當る。巡査は最低四十圓月收、最高六十四圓と廣告にあるから平均五十二圓で勤務時間三百六十時間で割ると一時間十四錢四厘四毛四、となる。其れが二十人掛れば二圓八十八錢八厘である。其の他乘客が乘り後れを氣遣ふ不安からの無形の損害は到底算定は難つかしい。高等官と大工は休みの時間は酒飲時間で大概は煙草を喫む時間が給料になつてゐるんだから此れはステエションに來てゐても餘り手間に損失はないが、何しい斯う計上して見るとニシン大將が一度ステエションに出られると國家には巨額の損亡となるのである。年金や勳章の外に是れだけの利息を着けて置かねばならないとなると、

苦しいのは通行税や間接に砂糖税を拂うおれたちだけだ。

友人は幸ひ其の汽車で來なかつた。おれはどの位安心したか知れやしない

斯う焦らされて、汽車が動き出してから飛び降りでもして、車輪に觸れて、怪我をするか、生命でも取られては大變である。おれは此樣な廻り合せにならうとは思はないから、別に救護班を拉れても來ないし、花輪の用意もしてゐない。是れからの例もあることだが、此れほどの影響のある事件なんだから、前以て新聞紙上に知事さんか、師團長かが、

廣　告

本日午前十一時何分明石行列車を以て〇〇〇議長陸軍大將(又は元帥)正二位大勳位功一級公爵〇〇〇〇閣下大演習執行地方へ下降あらせらるゝに付庶民下賤のものは列車昇降の際閣下の通路を妨げざるやう心得置くべし。

但し有爵者若くば勳五等以上の者には特別の取扱ひを爲すことあるべし

〇〇〇知事

正四位勳三等　何　某

位の事はして頂かないぢや、我々蟲ケラは實際面食つて了ふ。

おれは國家損亡の算定法で大いに得意だつたから、歸つて早速從兄に話した。すると從兄はおれを散々きめ着けた末、

『貴樣の頭はガランチンだ』

と言つた。

『ガランチンとは何んですか』

と質問したら、

「くちや〳〵でお負けに油で揚げてある」

と抜かした。勝手な事をほざく。おれの頭を料理と思つてゐるらしい、おれは隙かさず、

『僕の頭がガランチンなら、兄さんは、トンツウトンツウトンツウトンツウトンツウトン、トンツウトンツウトン、トンツウトンツウトンだ』

と言つてやつた。從兄は『ふん』と解つた風姿をして大きな雜誌で顏を埋めた態を見ろ。此れほどの惡口を言れても解るまい。おれは『おたんちん』と言つたのだ。ガランチンのおたんちんか、此りあ思はず新案特許だ。從兄から聞くと新發明には十圓の特許稅が入るさうだ。おれは『喧嘩口論用器具』として特許局に申請して見る積りだつたが、唯だ心配なのは噂に由ると願書には別に純金伸金の印紙を貼らねばならないと言ふから餘程確かな金主を發見しないでは七十三錢の日給ぢや、當てないうちに身代限りにならう。最も蔓が

あれば存外早いとも言ふから、裏の畑へ願書を植へて芽が出て蔓の伸びるのを待つことに仕やう。

細君が何か臺所でぶつ〳〵憤慨してゐると思つたら、醬油とか味噌とかが品が段々惡くなるし、鹽は三盆太白を賴んで置いたのにザラメを持つて來た東京ぢや御得意には特別勉强するが上方ぢやお得意になると段々虐待すると言つてゐる。おれは男だから臺所の事なんかには關係はないが、鹽の黑いのは初耳だ。今に世の中が進歩すると竈の上の天井にお白粉が吹いて、婦の顏に煤を塗るやうになるかも知れない。其れは兎に角く此の女は何んでも東京でなければ夜が明けない。最も田舍育ちの癖に秋魚の干物に感心したり、鹽鮭だけは東京製に限つたりする見榮坊がある。細君も大方其の仲間だらう。此の女は品川の御臺場で生れたとかでお品と言ふ名が附いてゐる位で、十四

の年まで東京で育つたとやら、御蔭で馬より無學だ。何所の馬だつて正當にヒン〳〵と發音する。此所の細君は好く從兄にかゝかはれてゐるが馬はシン〳〵と鳴きますと平氣でゐる。シコウキがシエイ山の方からシジャウな勢ひでシコウして來てシックリ返つてシコウ將校のシラタと言ふシトがヒンで了つたんだんぢや日本人には通じない。シビ谷公園とは鮪でも賣る所だらう。人を猪豚にしてゐる。此樣な語ゐ標準にするのは馬にも耻かしいことだ。文部省ならばこそ此の位の度胸があると言ふもんだ。所で從兄は、

『其りや上方の方が正當だ。商人が御得意を大事にするのは儲けさせてくれるからだらう。苟も御客ともあるものが商人の儲をへずるなどゝはケチな考へだ。氣位の高い江戸ッ子にも似合はない』

と氣焰を上げた。其の位感心な考へがあるなち、もう少し居候の待遇も鰻上

りに改良したらどうだ。

然し日本中見渡した所で標準になりさうな語はちよつとない。京都見たいに、『まつしやろ』、『まへん』、『どつせ』では第一假名で書くに容易ぢやない熊本のやうに『ドンゴ讀みのドンゴ知らず』では樂屋落ちで他人に通じぬ。佐賀人のやうに『唯だ今から大隈侯爵がカリカリの辭を述べられます』では開會第一大隈さんが薩摩芋の油揚賣になつて、『あゝコリヤ、雨が降つてもカアリカリ』でもやられるやうに聞える。さればと言つて『天下のススズンズン』で志士仁人を天井裏にぶら下げたり、『ススの帶を締めた女のストが動物園のススを見てゐる』のでは何が何んだか薩張り解らない。高知に行つて『そこなくにあるらう』ぢや何の事やら知れないし、『狂介さあいづいものにおなりやつたものいのう』、『げゑんと、げんと、げにそういのう』の長州女や

『いつときや、みあげもはんぢやつたら、わつせ、おうきう、おなりやしたがよう、おんだ、もう』の鹿兒島女に飛び出されちや、日本人だか、西洋人だかの區別がつくまい。それかと思ふと『さうきやあもう、かうきやもう』と五位鷺と牛とがちやんぽんに啼く所もあれば、『ばつてん、ばつてん』と雪駄を引摺る所もある。此れではエスペランドでも通用させるよりなからう。

此樣な事を言つてゐる間に從兄は到頭此の家を追ひ出されさうだ。豆成金が家を建てるのが急ぐと言ふので毎日の樣に舊の家主が催促するんださうだ。舊の家主は老人の後家さんで、饅頭を十ばかり手土產に持つて來て、從兄に『早く引き拂つてくれるやうに』懇々と哀願してゐた。從兄は『毎日從弟と兩人で駈け廻つてゐるんですが、少しも家が無いので困ります』とおれまで引合に出して詫びてゐる。此の家でおれが役に立つのは何時でも、此樣な申譯

のときに限る。今に米屋邊りに、『何分此樣な居候がゐるもんですから』と斷りを言ふかも知れない。人を煮出すにも事に依りけりだ。昨日は從兄の友人の兄さんが死んで家が明くと言ふので、從兄は友人と話しをつけて其の友人の兄さんのうちの家主の所へ談判に行つた。すると家主は、『もう敷金も證書も別な方面から預つてゐるから、他へ廻す譯には行かない』と言つてゐた貸家の二重貸とは恐れ入る。おれが玄關の外で聞いた所では、其の借りたいと言ふ男は、友人の兄さんが死んだ翌日から談判に來てゐると言ふ事だ。『それでは其の人の跡が明きましやう』と言ふので、其の家を聞いて從兄と兩人で押し掛けたが、驚くべし、其の人の跡へ來る人がもう定まつてゐた。根氣の好い從兄は其の次の人の跡を訊いて尋ねに行つた。所が此れは銀行の支配人だつた主人がお死んだので、小さい家に移る所だとあつて、自分の家を四十圓

で貸して家賃の差引で生活費の補足をしやうと言ふほど大きな邸なので、從兄の遞傳探索は此れで途切れた。それにしても驚き入つた事だ。中流以下の景氣が好いからだと從兄は實業家らしい事を言つて嘆息してゐる。それにしても迷惑な世の中になつたもんだ。此の分で行くと、『あそこの嫁さんがインフルエンザから肺炎になつたさうだ』と言ふが噂が立つと、『それ家の娘を』と言ふので、敷銀と證書を入れて嫁入を待たすことになるだらう。おれなんか一人前になつたら、細君の健康なうちからでも好い、三四軒から敷銀を取つて置かう。愈死んだとなつたら、急設の方で、二百圓位を出したのから採用することにすると、此ればかりでも商賣になる。急設は五ヶ年は動かせないんだから、來る方でも安心なもんだ。從兄なんかも斯う貧乏をしてゐる位なら、此の位の融通を利かすと、例の家計簿も畏はくはなからうが、財政

に掛けてはおれより低能だから、七六ヶ敷い理屈を言ふばかりで、一向梲は上らない。

今日新聞を讀んでゐると、大阪では道德普及會と言ふものが出來て、百圓の懸賞で、電車の乘客の心得になる語を募集するさうだ。成程好い思ひ着きだ。『貯金は誰れでも出來る御奉公』と言ふので百圓の懸賞を貰つた人がある世の中だから、『通行稅二錢拂へば忠君愛國』とでも言へば百圓は確かだ。新渡戸博士は『日本では額が立派に國民の義務を盡くしてゐる。學校などでは額に天晴な語が書いてあつて、生徒の道德は皆其れへ御預けだ』と言つたさうだ。其の言ひ分からすると、電車に立派な額を掛けたら、おれたちも七面倒な道德だの公德だのと、老人たちから說敎されないで濟むだらう。道德が百圓で買へるし、四分五厘が八厘の利息を頂いて御奉公が出來りや何より樂

だ。これからはおれも少々餡パン代を儉約して、徴兵の方を御免を被ることにしやう。何にしろ官で鑑定した御奉公の輕便法だから、誰に文句のある筈がない。大阪の方も知事さんが委員長だと言ふから、其の鑑定次第でおれたちの行く道も樂にならうと言ふもんだ。それでも回數券を買へば、賣國奴で往復切符を買つたら國賊になるんぢや、七十三錢日給のおれたちは死刑にでもなるより外はない。神樣にも直ぐなれるし、國賊にも御手輕になれるんだから物騷千萬だ。待てよさうすると、あの市會議員や市の顏役や、小さな皮の紙挿みを車掌に見せて、大風に納まつてゐるのは、あれは何になるだらう逆に公侯伯子男でも造らねば、國賊の等級が不公平になる。今にマイナス男爵何の某、ラジカル伯爵何の誰兵衛、左翼公爵何の蟹之丞なんかと言ふ奴がザラに出來るだらう。斯うなつては大阪で住友男爵一人か幅を利かされる

のも今のうちだ。最もどうで何とか橋の德さんも國際聯盟で男爵だらうからどちらにしても今の時勢、餘儀ない仕儀と住友さんに觀念して頂くより外はあるまい。それはさうと大阪の知事さんは此樣な事を始めて免職になりはしまいかとおれは蔭ながら心配してゐる。法律が正直に行はれるやうにしてさへ、エルダア何んとやらの評議や御聲掛りがあると言ふ。此樣な評議は大抵小田原のやうだが昔から小田原評議は六ケ敷いものださうた。前の句は忘れたが『コチヤ小田原評議で熱くなるコチヤエ、コチヤエ、』と歌にあつたと思つてゐる。其の熱くなるのは何の皮か知らないが、兎も角法律でも何とか成るらしいとおれは平生睨んでゐる。法律さへも正當に行つては怪しからん日本の國で、道德を普及させやうと言ふのは以ての外だ。いくらデモクラシの世の中でも先輩を無視すると言ふもんだらう。道德と言ふ以上は電車に乘

り降りの注意位で滿足する連中ぢやあるまい。藝妓を夫人にしてはいけなかつたり、料理屋で政治の話をしたり、總て學生が制服制帽でやつてはいけない事を含むのだらう。老人の道德と青年の守る道と二つない以上は、どうで其所まで行かねばなるまい。其樣な大それた、不心得な議論を吐かれては日本は眞闇になるよりない。其樣なものが普及された日には、一體誰が政治の指南をする。誰が大臣になるだらう。代議士は誰がする。コウ大阪の知事さん、常談も置き置きに願ひますよ、へん、ぺらぼうめ、其樣な事をされて御たまり拳があるものかい。と言ひたくなる。大隈さんは流石に偉らい。平生新聞には娼妓はいけないの、青年男女の貞潔はどうのと言つてゐたが、あれは松方さん其の外品行方正な元老始め政治家たちの信用を得て政治を乘り取る口實で、內務大臣になるとすぐ其の敏腕を揮つて大阪の飛田に遊廓を拵

メルにして除けた因果は覿面、胃が惡くなつて、此頃の從兄の細君見たいに唾液が出て仕樣がない。而して足が痺れるし、胸が苦しい。噂に聞く脚氣かも知れない。脚氣は故郷に歸ると直ぐ治るさうだ。

斯う思つてゐる所へ、今日課長に呼び出された。同勢が多い以上は心配しなくとも好いと思つてゐると、課長先生にこ〳〵して辭令をくれた。開いて見ると、

金六圓

通信手　鎌田英次

右大正〇年度第壹期通信現業員勤勉手當トシテ給與

大年〇年六月二十日

とあつた。それ見ろ。おれの勤勉は折紙附きだ。此れなら故郷に歸つても親

えられたさうだ。これは從兄が言つたのだから間違いはない。斯うなると今に早稲田の鶴卷町邊にも大隈さんには腹案があるだらう。從つてあの邊の地代が上つて、毎年十三萬圓位は又高遠の理想で儲かるかも知れない。從兄に言つたら、火のやうになつておれを怒鳴り着けた。兎も角道德普及會などゝは刻限も場合も場所も辨へない非國家主義者の言ふ事だ。日本には不道德普及會と言ふ不文の規約を服膺した堅固な大團體がある。

陽氣の加減か少し頭が混線して來たが、此れも從兄の側にゐるお蔭だ。若しおれの申分が不都合だとあつて丑の時詣りをされるなら藁人形は從兄に似せて願いたい、おれには少しも意地惡や此樣な大人ひだ事を言ふ積りはないからだ。

唯だ頭が混線したばかりぢやない。日給拾七圓四拾錢を皆餡パンとキャラ

父に怒鳴られる心配はない。六圓では汽船の中で大黑屋のオコシを食つたり多度津の饅頭、丸龜の竹輪と名物を賞玩して行く費用が足りない。大阪で覺えたセブン屋は苟も判任官未遂の足踏すべき場所ではない。となると從兄に三四圓出させるのが一番健全な方法である。然し奴は此の頃中々油斷をしないから事面倒である。脚氣が今日あたりから重くなつたことにでもしやう息切れの眞似をするのは存外骨は折れないから先づ以て露見の虞れはない。其所で此の疳想錄も一應中止する。人が讀んでくれるとあれば、いくらでも書く。どれ、早速息が切れ始めやう。

おれが見た世間の奴等　終

おれは世間様に失禮千萬な、此様な標題をおれの本にくつつける積りは毛頭なかつたのだが、うつかり口が滑べつたが最期、本屋の主人公が其れをくつつけて何と言つても聞かない。檢事に訴へた所で、『それは示談にしろ』に定つてる。何しろおれの言ふ通りぢや世間が讀まないんださうだ。從つておれと標題とは何の關係もない事を斷つて置く。憤慨する人は世間が惡いんだと思つて頂きたい。念の爲め自分で拔を書く。最も雀の白秋さんと違つておれは獨身だ。だからおれが書くより致方はない。

大正九年六月十一日印刷
大正九年六月十五日發行

おれが見た世間の奴等
定價金壹圓貳拾錢

著作者　龜井寛三郎　東京市日本橋區檜物町二十六番地
發行者　江藤邦松　東京市京橋區本八丁堀四丁目
印刷者　古川健作
發行所　文潮社　東京市日本橋區檜物町

發賣所　東京市日本橋區檜物町　振替口座東京二三〇番　電話本局四八二九番　弘學館書店

印刷所　株式會社共榮舍印刷所

不許
復製

好評の名著

黒頭巾氏 横山健堂先生著 ○縮刷 大西郷 寸珍上製 金貳圓 送料金八錢

大町桂月先生著 ○書翰十二ケ月 大形上製 金貳圓 送料金拾四錢

同 ○縮刷 新人國記 寸珍上製 金貳圓五拾錢 送料金拾錢

碧瑠璃園氏傑作 ○縮刷 鹽原多助 寸珍上製 金壹圓五拾錢 送料金八錢

佐々木邦先生著 ○縮刷合卷 いたづら小僧日記 おてんば娘日記 寸珍上製 金壹圓四拾錢 送料金八錢

同 ○諷刺諧謔 姑め采配記 寸珍上製 金九拾五錢 送料金八錢

龜井寛三郎先生著 ○諷刺諧謔 おれが見た世間の奴等 寸珍上製 金壹圓貳拾錢 送料金八錢

文學博士 田中義成先生著 ○日本武士 寸珍上製 金壹圓五拾錢 送料金八錢

481
1/84

終